

ある山論の一断面

― 乳井・薬師堂間山論消滅の過程 ―

斎藤 康 司

一

弘前市農林業師堂支店には弘前市大字薬師堂と大字乳井に居住する組合員が所属している。この両部落の組合員の関係はあまりしっくりいっていない。農村の部落対立はどこにでもあることで特に異とすべきものではないが、薬師堂・乳井間の対立だけは他の一般のそれと周旋にするわけにはいかないようである。もともとこの二つの部落は別々の農校をもっていた。昭和四十年十月弘前市内の大半の農校が合併した時、薬師堂農校は合併に参加したが乳井農校は参加しなかった。参加しなかったというよりも参加できなかったというたらいのいかも知れない。合併条件である赤字の三分の一を自分で埋めるということができなかったのである。薬師堂も乳井も組合員三百人足らずの、いわゆる部落組合で共に赤字経営であつたのだが、薬師堂の方は合併条件を満たすことができたのである。

乳井組合の方はその後周店休業で、やがて市農校の勃

発が行われて、乳井から組合加入する者が百名近くも出た。市農校の発足から一年余りおくれたにすぎないが、薬師堂の方に新参者を迎える意識、乳井の方におくれて参加した者の意識が多少とも働いたとしても無理のないことである。部落組合の終極では想像も及ばなかったマンモス農校の運営を一年間経験した者と新参者の意識の差は意外と大きかつたのである。

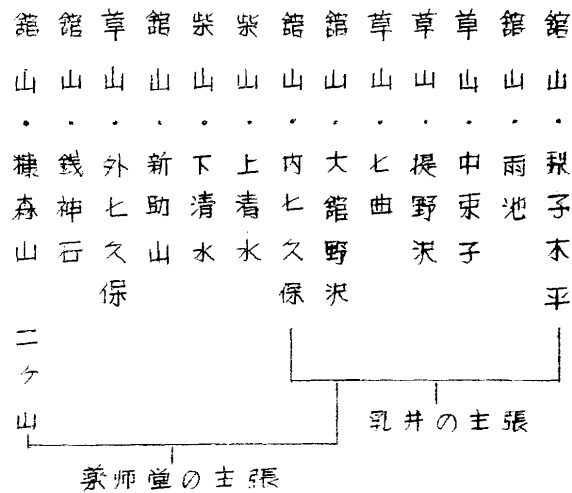
しかし薬師堂と乳井の組合員の間にしっくりいかないものがあるというのは、以上述べた農校合併の経過にあるのではない。それも一つの原因を有しているが、両部落対立の根はもっと深く藩政時代の山争いにまでさかのぼるのである。私はその山論の経過を明らかにすることで今日現在までもちこされている対立を解消できるのでないかと考えて、かつて「青森県りんご産産史」(ハオ六卷)を書いたために調査したことをさらに深めてみた。その結果は去る四十五年一月三十一日の国史研究会大会で「乳井・薬師堂間山論消滅の経過」と題して報告したとおりである。

ところで、あの報告を今ふりかえつてみると、文字どおり経過を山つにだけであつて、問題意識の稀薄さから、その経過が何によつてもたらされたのかという直求がほとんどされていないことに気づく。年代順に史料を並べただけで研究というものではないのである。それなのに、あの報告を文章化して「國史研究」に寄ぜろという約束をして久しく、編集者は厳しくその約束の実行を追つて計らうとしないう。やむなく山論経過の概要を追求し、これに問題点をあけて会賢諸兄の叱正をもうことにした。

二

明治三十年に始まり同三十六年で一応終結した而部落の訴状合戦の史料によると、而部落がもつていた山は別表のとおりである。つまり十三の山のうち大館野沢と内ヒ久保が帰属争いの山で、二山とも館山である。

館山というのは柴山や草山とは違つて津輕藩山制上の名称であるが、その定義には諸説があつて決めがたい。例えげ館山は連山とも書きその性質は仕立見継山と同じで管理収益の主体が部落にあつたという説がある。また寛永年中藩政が窮乏したさい多くの藩士を在宅帰農させた、それらの藩士が栽植して培養保護した山を弘前へ帰任するさい地元の部落民に譲渡したものが館山でやはり性質は仕立見継山と同一であるという説もある。そこで仕立見継山の性格が問題になるのであるが、これはほ



ぼ次のようにいつてよいであらう。すなわち御本山（藩直營のご禁山）やその他の山の空地に、藩の許可を得て人民が自費で樅樹を植保管理して表に山で、抱山（私有林）証文を附与すべきところを何らかの理由で与えないために抱山とは名称を別にしたものである。栽植したのが個人の場合藩地私水林、部落の場合は藩地公水林ということになり、明治の地租改正、官民有土地区分では民有林と与るべき山である。しかし実際には抱山証文がないために三等官林として国有地に編入されたことは周知のとおりである。つまりもともと館山は帰属争いの種

と胎んでいる山友のである。^{註①}

藩政時代の両部落の争い、徒然強訴や贈收賄事件等については、古くは中村良之進著「青森県南津軽郡石川町郷土史」が、最近では山上貢著「続のぼるの夜明け」が書いているのでそれにゆずるとして、結局落の手では解決できずに明治新政を迎えたのである。

地租改正の調査に際しては両部落とも当然のように大館野沢、内七久保の二山を自分村持として届け出た。立見継山については国有地へ編入しようというのが中央から派遣されて来た役人の方針であつたし、紛争の山であればなおさらそうした方が仕出しやすいわけである。文化九年の藩の裁定が喧嘩兩成敗にして、両山を藩直管にしたのと同じ権力的処分である。

一葉官山に編入された山を取戻すことは明治三十二年の国有土地森林下戻法制定まで全く不可能であつた。もっとも明治新政府の山林制度創設に当つた役人の考へは下戻法の公布をここまで引きのばす考へではなかった。確かに多くの立見継山が官林に編入されなければ、それはみづ三官林としてであつて、三官官林というのは直ちに払い下げすべきものであつたのである。一官官林は永久存置、二官官林は追つて処分を決定するというのが明治大正の時点での政府の方針であつた。^{註②}それが払い下げも下戻しも手続きのしようもないままに放置されたのは明治新政府の権力の衰微、絶対主義的中央集権

化によるとしてよいであらう。

三

紛争の両山が官地に編入されたことにのいては、当初あるいは両部落もあきらめたかも知れない。近隣のほとんどの山の運命がそうであつたし、官地に編入されても従前どおりの使用収益が許されると考えたのが一般であつたからである。ところが両山の両には通称千子場といふ既に畑地化しているところがあつてこれが耕作を禁止された。而してしたのは棄師堂の人もあつたし乳井の人もあつたようで、これだけは区してもらいたいといふことで両部落それぞれ下置の嘆願をしている。棄師堂の百姓惣代と村用係代理の二人が青森の旅宿から明治八年十月十二日に県参事塩谷良翰に提出した「起返シ畑地ノ義ニ付歎願」には「去ル二日、五日両處願書差出候得共爾等何等ノ御指令モ無御座」と役所仕事への懺悔が述べられているだけに、役所が勝手に方針を変えて部落の人たちを困惑させていることが明らかにされている。すなわち「右畑地ノ儀ハ御改正御係ヨリ兼テ村持ノ儀ニテ被渡候モ有之ニ付村中一同ニテ手入教百夫ヲ費シ試ニ蕎麦ヲ蒔付昨今実熟ノ秋ニ至リ可刈取時節ニ候得共戸長ヨリ取換シノ儀談示ニ預リ候」と書いているのである。

乳井の嘆願書は見ることでできないが、結局両部落の嘆願は聞き入れられず、かえつて次のような「御請書」

のまり誓書を書かされている。「而村地内ニ相持字大館
庄内七久保ト唱へ官山有之候処右官山ノ内乳井薬師堂而
村ノ者久会開懸作付□□共字千子場ト相唱へ来り候……
而ハ全ク官山ノ内切胸并不毛ノ地荒畑等ニ取調奉書上候
戦相違無之……百姓持地ト御定難相成旨被仰周承知畏候
此テハ石地所ニ付後赤苦情并故障ケ向敷義一切不奉申上
候」日付は八年十月二十八日で薬師堂の重立八人、乳井
の重立四人、それに戸長と副戸長が連署している。^{註③}

官山の重みを身をもって味わつた而部落の指導者たち
は、これを引戻す以外に部落の生活を守る道はないと痛
感した。誓書にもかかわらず幾度か嘆願をくりかえした
ことは、明治三十一年の薬師堂の「三等官山引戻申請書
」に「遺憾ノ余リ数度御引戻シ出願セシモ旧官簿ニ本山
ハ薬師堂村持分トアレトモ引戻スベキ成規ナキヲ以テ保
用スル能ハズトシテ終ニ今日ニ際シタル事莫ニ有之候」
とあるのによつて知ることが出来る。部落の村抗意識か
らいつて乳井の場合も同様の努力をしたに違いない。

三十年以降三十六年までの而部落の訴状合戦、申請競
争は熾烈をきわめる。弘前市役所石川出張所が保存する
「乳井薬師堂官有山林原野松下書類」に綴じてまかれてい
る願書、申請書の類は乳井の分八点、薬師堂の分十三点
に及ぶ。

三十年から競願が始まる理由は、りんご栽培の奨励と普
及のためである。西洋りんごが弘前士族による試験栽培

から地主層による園圃栽培に拡がり、ために地価の騰貴
を招いたので、部落有縁場が求められるようになった。
特に薬師堂の指導者白取布次太郎が銭神石の私有地にり
んごを植えたのは明治二十五年といわれており、水田の
少ない貧しい山村を富ますためにはりんごが最適である
として、部落民に奨めていた。内七久保は三十三町歩余
り、大館野沢は三十七町歩余りで、傾斜の急な山で旧館
山とはいえ東況は「草山ニシテ所々小柴生立アリ」とい
うわけで放っておくにはもつたいたなく、また部落の一般
の生活は余りに貧しかったのである。

三十年に競願が始まるもう一つの理由は引戻申請の直
が附けたことである。明治三十年四月二十七日提出の乳
井の下定申請書には「明治二十二年ニ至り山麓村々ニ於
テ委員ヲ定メ山林制度ノ改正ヲ望ムト當時ニテ申請地ノ
如キハ公有地トシテ民林ニ引直シ義請願ニ付着々歩ヲ進
メ容才中地方長官ニ対シ出願ノ処明治三十年八月農商務
省令才十三号ニ依り当該□□ニ申請スヘシトノ諭達ヲ以テ
引戻セラレタリ今回亦申請書ヲ呈出スルニ至リタル事実
ナリ」とある。すなわち二十二年に山村から委員をあけ
て下民運動を展開し、それが三十年に至つて手続きの道
がつき、さらに三十二年に下民法が公布されたのである。
二十四年に鳴海謙六、永米孫三郎編「青森県管内旧津軽
藩林制要領」が村々の重立に配られたのもこの運動の一
環としてであつた。二人の編者は藩藩置県のさい事務引

繼に當つた元弘前藩士で、明治政府の山林政策に憤慨して「総山ヲ拳テ官林ニ編入シ毫モ人民尙保セザルモノノ如ク調整セラレタルハ……」周明ノ風潮盛ニシテ旧習破壊之余勢徒ニ旧慣ヲ排斥シタル弊因ナラザルヲ保シ難シトス」と書いてゐる。むしろ旧藩時代の方が山下村民の権利と生活が守られていたということを明らかにしているのである。

下炭申請の直は開けたけれども実際には厚い壁が立ちふさがつていたことは、これまでにも十分明らかにされてきたことである。下炭法によつて三十三年六月三十日の申請期限までに集つた下炭申請件数は二万六百余件に及んだが、そのうち許可されたのは千三百余件にすぎなかつた。^{註④}而部落の嚴重なる申請も三十六年四月十七日付農商務大臣男爵平田東助名による農商務省指令林才四九四三号をもつて冷たい断を下された。「明治三十三年六月廿一日付申請固有林下炭ノ件南届ケ難シ」という一行に「証文書類ハ別紙目録ノ通還付ス」という附記がある。この指令は薬師堂の分で、別に乳井の分についても才四八八九号の同様指令が達せられている。

四

一体両山についての乳井、薬師堂の主張のどちらが正しいのであろうか、恐らくことの究明は不可能であろうし、今日の時点でもしそれを明らかにしようとしても何

らの意味をもたない。史料を調べ取りをして歩いて、而部落にとつてこのことは今なお強いタフであることを知らされたのである。石川出張所に一件書類の登録があることを私に教えた人は、固く名を秘すよう私に誓いを求めたし、聞き取りに対して、それが何の意味をもつかと強い疑問を示したり、まだその時期でないと断る人もあつたりして、私は而部落の和解のためにこそ真実の追求が必要だという私の考えが極めて非現実的であることを知らねばならなかつた。

従つてここでは而部落の申請書の要点を紹介することにとどめたいと想う。旧藩山制からいつて当然固有林とすべきだという主張とその傍証は而部落に共通していることだからはぶいて、帰属の問題だけにしければおよそ次のように整理されるようである。

乳井の主張

薬師堂はもともと乳井の一部であつて天和四年書き上りて旧藩に提出した村領絵図によつても薬師堂の名はなく上乳井・下乳井となつてゐる。下乳井が薬師堂として分村した後の宝永元申年乳井村検地元帖によると二山は乳井村立山になつてゐる。さらに明和八卯年に乳井村の山は全部漆山を命じられ、その証文も与えられたので乳井の持山であるという権利はいつその確実とされた。へほかに文化五年の藩の裁決書もあけてゐるがこれは両山を乳井のものとするもので、文化六年の裁決では逆に両

山を兼師堂のものとするのであるからこゝでは意味がないであらう。」

兼師堂の主張

兼師堂は往古日照田村といつて独立の村であつた。それ以下乳井村となつてゐたかも知れぬ乳井村と一村のように思はれるようになったのは村庄屋がニカ村を支配した便所からで、各々が独立の村であつたことは詳しい村絵図では上乳井村支村、下乳井村支村とそれぞれの支村も書きこまれてゐることによつても明らかである。而山が兼師堂のものであることは、明和八辛卯年旧藩奉行から与へられた漆仕立証文や杉仕立証文、また天明元丑年から文化五辰年まで二十八ヶ年間に而山に数度挿入した記録、出役した人夫帖等によつて証明できる。へこのほか旧藩時代の山論のくりかえしをしていることは乳井と同様であるがやはり省略しておこう。

さて乳井は六本の証拠書類、兼師堂は十五本の証拠書類を添付して申請した。その後申請のしなおしや追加証拠書類の提出等をくりかえしたが、画の裁決が終つて返された証拠書類はその目録によると乳井十本、兼師堂八本となつてゐる。絵図や水帖や見継山調書上帖等であるが、ズバリ而山の帰属を明らかにするものは見当らない。それは当然であつて、それなればこそ藩政時代から延々紛争をくりかえしてきたのである。

五

ところで下宸申請書には村長の意見書がついてゐるのであるが、而部落の圧力が強いためか終始強硬的で、積極的に解決しようという姿勢は一度も示さずに終つてゐる。先ず三十五年十一月三十日、つまり而部落の申請書に「前書之通相違無文ニ付與書候也」と附記して上達した直後の時点で次のような意見書を提出してゐるのである。すなわち而山は往昔からの争論地で、ために明治九年三等官山に編入されて而部落の境界も確定したのに、今になつて競願するというのはその筋の内訓の趣旨にも悖り人民の不利にもなることである、にもかかわりず出願にいたつたのは旧情に走つた結果と思われれるとし、「尚証拠書類、如キハ精密調査ヲ遂ケタルニモアラサレハ暫カニ公認スル能ハス仍テ意見ヲ見シ進達」すると書いてゐる。

この意見書は明らかに申請書與書と矛盾する。そこを県方の役人にでも指摘されたのであろうが「與書取消、義ニ付上申」という起案文が残されてゐる。「本職ニ於テ與印シタルハ取扱ノ書記通常願書ノ例ナリト心得調書シタル義ニシテ……其事更及理由立證ノ証明ヲ与ヘタルモノニ無之」と書いてゐる。

旧藩の行政単位であつた部落に対して明治の行政単位であつた村の地位が、ここに端的に示されてゐる。部落

有財産に對して行政村は全く権限をもたなかつたのである。國が明治四十年に森林法を改正して部落有林野の整理統一に努めて市町村有に引き直し、又入会権を整理しようとしたのも、この矛盾を解消するためであつたが、その目的はほとんど達成されなかつた。それだけ山と部落の結びつきは強固なもので、その故の山論の頻発であるが、國に人民を保守する政策がなく行政村が國の單なる下請機關にすぎない時、官山の山下村民がおかれに立場は、多かれ少なかれ乳井、業師堂の場合と同様であつたろう。

しかし部落の人々は生きていかねばならない。貨幣經濟の浸透による窮乏化と戦わねばならない。そこで起つたのが盜伐であつたが乳井、業師堂の場合は両山とも実況は雜木と録場であつたから畑地化をしていったのである。營林局の用語でいへば無願慢用で弁償金をとられるのであるが、もともとは自分の山であつたのだという意識がある。乳井、業師堂のみならず兩津輕郡の三等官林の多くは下炭が実現しないのにしびれをきらした部落民によつて分割され畑地化されりんごが植えられていった。結局内七久保が業師堂のものになつたのは戦後の農地改革までもちこされ、二十五年と三十三年の兩度にわたつて部落民に売却された。現今の業師堂寺番長根六十八番地である。大館野沢の方はずっと早く大正二年笹田粕太郎以下に払い下げられ、昭和二年に毎戸による登記

が行われている。乳井沢田七十五番地がそれである。ここに至る経過を調べることはもちろん大きな課題であるが未だに手をつけれずにいる。而部落のうち被害者意識、つまり山を取られたとしているのが乳井の方であつて業師堂には被害者意識はもちろんないが被害者意識も余り認められないことと右の結着がどのようにかかわるのか。現今のところ不明である。現実の問題としては弘前市農校業師堂支店が媒体となつて兩部落の融和と協力が深められることを期待するだけである。そしてその期待が多分かなえられるだろうことは、①両山とも他部落を含めて出作、入作が多く、部落の山という觀念は薄れつつあり、②今日の三十代以下の人々は山の争いがあつたことなどにはほとんど関心をもつておらず、③業師堂支店が兩部落組合員の協力によつてその業績があがつてゐることからいえるのである。

註① 津輕藩山制については杉本壽著「林野所有權の基礎的研究」森林の名称ならびに性質とその所有權的分析」（舊森林友別刷昭和四十年三月）におうところが多い。

註② 永井彰一「産業興隆史」（自治産業興隆史所載昭和八年）による。

註③ 白取高明氏所蔵「諸書類聚」

註④ 前掲「産業興隆史」

註

私はこのような事実があったことを南津輕郡茅岡町本郷大字田ノ沢の払い下げ経過を調べて初めて知ることができた。同地は明治四十二年の宮林局係官の調査復命書に払い下げるべしとあるにもかゝわらず昭和二年までそれは実現しなかった。しかし本郷部落では払い下げを見こして地上権を分割配分したので度々弁償金を払わされたことが青森宮林局が

保管する台帳の上に貼られた幾枚もの付箋によりて知ることができた。その一枚は「無願使用ニ付弁償金一町歩一ヶ年金三円六十銭ノ割ヨ以テ徴收スベキ旨五年林才七五二一号ヨ以テ通牒と書かれていた。